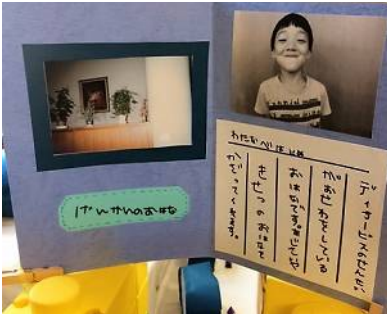




はじめてとらきち君からの手紙を読む方へ、はじめ君とよう君は店長の孫です。多少の可愛いがりすぎは、お許し下さい。



はじめ君は保育園で、「自分が一番好きな写真」という課題で、保育園の玄関に置いてあるお花を撮りました。説明には、「デイサービスの先生がお世話をしているお花です。あじさいや季節のお花を飾ってくれます。」と書いてあります。家族の写真が多い中、何かホンワカします。



小林麻央さん(34歳)はステージIV(末期)の乳がんです。

9月23日の麻央さんのブログには【ごめんね。病気になっちゃった妻で…病気になっちゃった娘で…病気になっちゃった妹で…。きつと、病気になって、皆が一番思う言葉かも知れない。「ごめんなさい。。。】と書かれています。別の日のブログには【この子達のママは私ひとりなんだ、という喜びと怖さに、心がふるえた。絶対治す!と誓った】とあります。

ボクは、麻央さんのがんは、消えると確信しています。何故なら、自らの前向きな気持ちと家族だけではない、日本中の人達の祈りにも似た応援団がいるからです。

英国のデータでがん患者を①闘争心②否定③受容④絶望という4つのタイプに分けて、生存率を調査したものがあります。すると、①の闘争心という気持ちの患者さんは5年後の生存率は7割でした。

実際に進行がんと宣告されながら、何もせずに奇跡的に生還した例は世界中にいくつもあります。そうした患者100人以上をインタビューして著書「がんが自然に治る生き方」を書いた、カルフォルニア大学バークレー校博士でがんの研究家であるケーリー・ターナー氏は語っています。

「感情による身体への作用は驚異的です。



愛やよろこび、幸福を感じると、脳内の分泌細胞から身体を治癒させるホルモンが血中へと放出されます。この作用による免疫システムが、がん細胞除去の力を向上させることが

わかっています。抗癌剤治療中、笑うと免疫細胞が増加することも明らかになっています。」

ターナー氏によれば、乳がん患者を対象にした大規模調査で、治療に一人きりで対応した人は、10人またはそれ以上の友人からサポートを受けた人よりも、死亡する率が4倍も高かったそうです。「人とのつながりは免疫システムの強化をうながします。また身体のふれあいにも治癒を促す要素があります。」

ターナー氏が出合ったダイアナは、61歳の時に子宮頸がんステージIVと診断されました。彼女はさまざまな治療を受けたものの効果がなく、最後を自宅で迎えるために退院しました。そんなダイアナのために夫は、毎日、ひたすら側にいました。体調が悪いときはベッドでずっと抱きしめていました。そして、友人や家族を自宅に呼び、ダイアナのために祈ってもらいました。

すると驚くことに、彼女の病状は回復に向かったのです。それから5年でがんは消えました。

なにより大切なことは『死にたくない』ではなく、『どうしても生きていたい理由』を持つことだという。数多くの研究が、抑うつ状態にある、または無力感を抱いているがん患者は、そうでない患者より生存期間が短かったと報告しています。



「笑いヨガ」は、否定的なことも受け入れ、プラスに変えてしまいます。従って、負の感情をもコントロールできます。

麻央ちゃんも一緒に笑いヨガやりましょうよ!「ホ・ホ・ハ・ハ、イエ〜イ」(\*^\_^\*)